

マルコによる福音書4章「御言葉に対する聞き方」

1A 種蒔きの譬え 1-34

1B 四種類の土 1-20

1C 聞く耳に応じた譬え 1-9

2C 解き明かし 10-20

2B 聞き方への注意 21-25

3B 種からの成長 26-32

2A 嵐の中での信頼 35-41

本文

マルコによる福音書4章を見て行きましょう。私たちは、神の子、イエス・キリストの福音という主題で、マルコによる福音書を読み進めています。イエス様が福音を伝えて行かれています中で、主に二つの課題がありました。一つは、ご自身の働きに反対するパリサイ人や律法学者たちです。前回、私たちは、彼らが、イエス様が悪霊を追い出されているのを、悪霊のかしらベルゼベルによって追い出しているのだとして、聖霊の働きを冒涇したところを見ました。

けれども、もう一つは一見、反対していないようで、実は大きな妨げにさえなっている動きがありました。それが、日増しに大きくなる群衆です。数多くの人々が来ているのは、すばらしいことに見えますが、はたして何を目的にして来ているのかが、分からないような状況にもなりかねません。イエス・キリストの福音が目的なのに、そうではないものを求めて来ていることが考えられます。世の流れの中に、イエス・キリストの福音が埋没してしまう危険があるのです。

ある兄弟が興味深いことを話してくれました。イスラム教の国で慈善活動をしているキリスト教の団体があるそうです。けれども、その団体はその存続のために自分たちがキリスト教であることも名乗っていないとのことでした。それでは、単なる他の慈善団体と変らなくなってしまうではないか？ということでした。これは、その通りだと思いました。慈善行為をすることは、一般社会の中で認められています。けれども、キリスト者の慈善行為は、キリストの名のゆえに行ないます。この方にある罪の赦しの福音こそが、人を救うことを知っています。けれども、そのように大勢の人々の流れの中で、自分たちの最も大切にしていることが埋もれてしまう危険があるのです。

1A 種蒔きの譬え 1-34

そうしたことで、イエス様が語り始められたのは「譬え」です。当時の人々が誰でも知っている、身近な題材を譬えにして語られます。その話自体は、誰の耳にも心地よいものです。けれども、聞く耳のある人には、それが神の国の内実をを明らかにする真理が含まれていることを知ります。イ

イエスは弟子たちには、その中身を解き明かしてくださいました。そのようにして、真実にイエス様を求める人々にも教えることができ、かつ聞く耳の持っていない群衆に対しても分かる言葉を選ぶことによって、二つのグループにそれぞれ語ることで話を選ばれました。それが譬えです。

1B 四種類の土 1-20

1C 聞く耳に応じた譬え 1-9

1 イエスは、再び湖のほとりで教え始められた。非常に多くの群衆がみもとに集まったので、イエスは湖で、舟に乗って腰を下ろされた。群衆はみな、湖の近くの陸地にいた。

あまりにも多くの群衆がイエス様のところにやって来ていたので、イエス様は以前にも、群衆が押し寄せて来ないように、ご自分のために小舟を用意しておくよう、弟子たちに言いつけておられました(3:9)。再び、同じように小舟を出して、湖の上から群衆に教えられました。ユダヤ教では教師であるラビは、座って教えられます。私たちキリスト教会では、教える者が今、私がしているように、立っていますが、当時は座っていたのですね。

2 イエスは、多くのことをたとえによって教えられた。その教えの中でこう言われた。3 「よく聞きなさい。種を蒔く人が種蒔きに出かけた。4 蒔いていると、ある種が道端に落ちた。すると、鳥が来て食べてしまった。5 また、別の種は土の薄い岩地に落ちた。土が深くなかったのですぐに芽を出したが、6 日が昇るとしおれ、根づかずに枯れてしまった。7 また、別の種は茨の中に落ちた。すると、茨が伸びてふさいでしまったので、実を結ばなかった。8 また、別の種は良い地に落ちた。すると芽生え、育って実を結び、三十倍、六十倍、百倍になった。」9 そしてイエスは言われた。「聞く耳のある者は聞きなさい。」

譬えによって語られるのですが、その話の前に、「よく聞きなさい。」と言われて、そして「聞く耳のある者は聞きなさい。」という言葉で終わっておられます。聞くことについて注意するように、という呼びかけです。初めに、よく聞きなさいと言われたのは、全ての人に満遍なく聞くように言われますが、全ての人々がそれに応答するわけではありません。ですから、「聞く耳のある者は聞きなさい。」と言うことばで終えました。イエス様は、黙示録の七つの教会に対しても、それぞれの終わりに「耳のある者は、御霊が諸教会に告げることを聞きなさい。(2:29 等)」と言われました。このように、イエス様は、人々にご自分の言葉を無理やりこじ入れることはなさいません。絶えず、本人が聖霊の導きによって、その声を聞こうと思っている人々にのみ、その自由意志を尊重されて、聞こえるようにされます。

そしてその譬えは、当時のイスラエルの人たちにとっては、あまりにもありふれた光景であり、興味をそそるものだったでしょう。彼らは、農耕社会に暮らしていました。多くが農夫でした。都市に住んでいる人でさえ、田舎に小さな土地を所有して、農夫に耕すのを任せたり、また夏にだけそこ

に行って農作業をしたりと、農耕と密接に結びついた生活をしていたのです。そして種蒔きですが、ここにあるように、ばら蒔いていました。目的は、もちろん耕された土地に蒔くことですが、必ずしもそこに種がすべて落ちる訳ではありません。

ある種は、畦道に落ちます。畦道は踏み固められていますから、根づくはずがなく、鳥が来て食べてしまいます。そして、岩地にも落ちます。ここが日本とは土壌がかなり違うところですが、イスラエルの土地は岩が多いです。それらの岩にうっすらと土壌があるのですが、精々、深さは数センチです。そこで春にイスラエルに行きますと、一面に花が咲き、それはとても美しいです。私が2013年にぜひ沙漠を見てほしいとベエル・シェバの付近に案内したのですが、なんと一面が緑になっていて、黄色い花も咲いていました。岩地ですから熱を吸収しやすく、土が温まりやすく、またたく間に広がって行くのです。けれども、土が深くないので、乾燥するのも早く、枯れます。そして雑草が生えているところもあります。茨が生えたところに種が落ちたら、その種は芽を出し、育ちはしますが、茨も生えて伸びるので、塞いでしまい実が結ばれません。

ということで、唯一、実を結ばせるのは、良い土地に落ちたところで、種が落ちるとすごいことは、その種からなんと、三十倍、六十倍、百倍の実を結ばせることです。そうですね、例えば麦も、一粒の種から、何十倍の数の麦の粒を収穫できます。

こうやってイエス様は、人々の注意を引き寄せて、聞くことができる譬えを使われました。かつて預言者は、注意を引き寄せるために、例えばエゼキエルは左脇を横にして390日、そのままになっていました。それを見たら、人々は一体全体、何なのだろう？と思ったに違いありません。それで彼は、390年間、イスラエルの家の咎を負っているのだということを預言できたのです。聞く耳のある人には、神の真理を伝えることができました。

2C 解き明かし 10-20

10 さて、イエスだけになったとき、イエスの周りにいた人たちが、十二人とともに、これらのたとえのことを尋ねた。11 そこで、イエスは言われた。「あなたがたには神の国の奥義が与えられていますが、外の人たちには、すべてがたとえで語られるのです。

イエス様のところには、先に呼ばれた十二人の使徒だけでなく、他にも周りにいた人々がいて、彼らもイエス様にその譬えのことを尋ねていました。ここにイエス様の、心が表れています。イエス様は、ご自分が呼ばれた者たち、またご自分のそばにいて、その言葉を聞き、共に生活し、また仕えている者たちには、決して拒まず、ご自分の語られている真意を解き明かしていただきます。もっと人間的な言い方をすれば、「苦楽を共にした者たちにはみな、だれも拒まずに神の真理を明らかにして下さる。」ということです。十二人だけにしか明かさないサロンであるとか、秘密結社でもなければ、自分の身を捧げてもない人も含めた、全てに公開するわけでもありません。

そして、イエス様は、「神の国の奥義が与えられています」と言われます。この「奥義」という日本語ですが、良い訳だと思いますが、語弊もあります。修行のゆえに体得できる知恵のような語感があるかと思いますが、そうではなく、「神がこれまで隠しておられたものを、明らかにされたもの」というのがその意味です。これから習得しなければいけないものではなく、神が憐れみをかけ、恵みを降り注いでいる者たちに、ご自分の計画を明らかにしてくださった、というものです。それを、種蒔きという身近な譬えによって、明らかにして下さっています。

もう少し神のご計画全体からその奥義を眺めてみましょう。主は、旧約時代に預言者たちを通して、ご自分の国を建てられることを明らかにしておられました。それは、神に任命された王、キリストが支配される、正義と平和に満ちた国です。キリストが初めに来られた時に、ユダヤ人たちはキリストが現存のローマを倒し、彼らのために物理的に国を立ててくださると信じていました。けれども、神の国の奥義とはそういったものではありません。初めの人、アダムを神が造られた時に、エデンの園は確かに楽園でありましたが、本質は、神の命じられたところに聞き従うアダムの姿です。ところがアダムが罪を犯してしまい、その関係が切れてしまって、その結果、エデンの園から出て行かなければいけなくなりました。

そこで主は、アダムの犯した罪が世界に広がっているところを、まず人をその罪から救い、神の御霊によって、神の言われていることに聞き従うことのできる人々を、世から贖い出すことから始められます。それが、教会です。神はユダヤ人だけでなく、キリストにあって、異邦人の中からも、ご自分の言葉に聞き従う人々を集め、一つの体にしておられます。そして、その回復された神との関係にある者たちによって、物理的にも、正義と平和に満ちた神の国を到来せしめる、というご計画を持っておられます。目で見える形の神の国を大きな収穫に例えるなら、魂の救いによって人々を集めている働きを、「初穂」ということができます。ローマ 8 章には、キリストにある者たちを「御霊の初穂」と表現されています。

ですから、私たちは常に、礼拝を守ることによって、教会として共に集うことによって、後に来る栄光に満ちた神の国の前味を、その霊的喜びを味わっているのです。パウロが言いました。「ロマ 14:17 なぜなら、神の国は・・聖霊による義と平和と喜びだからです。」

12 それはこうあるからです。『彼らは、見るには見るが知ることはなく、聞くには聞くが悟ることはない。彼らが立ち返って赦されることのないように。』

イザヤの預言からの引用ですが、これは、神が聞く耳のある人々に敢えて聞こえないようにしているということではありません。「そのようになってしまう」という現実を、「そうなりなさい」という表現を行われているだけです。自分たちで聞くことを拒み、そう決めてしまっている者たちに対して、神は自由意志を尊重しなければいけないので、その結果を自ら刈り取るようにされている、という

ことです。主はお見せになっています。また聞かせています。イエス様は悪霊追い出しや病の癒しによって、ご自分の言葉に権威があることを示されました。けれども、この方が神からの方で、キリストであられることを受け入れず、証拠があるのに拒むのであれば、見ては見ても見ることはなく、聞くに聞くが悟ることはなく、なので悔い改めて罪赦されることもなくなってしまう、ということです。

13 そして、彼らにこう言われた。「このたとえが分からないのですか。そんなことで、どうしてすべてのたとえが理解できるでしょうか。

ここに、イエス様に付いてくる弟子たちのユーモアがあります。一言でいうならば、「いつもそばにいるのに、理解が遅い。けれども、イエス様にいつも愛されていて、選ばれている。」ということです。群衆には知らされていないことをイエス様は明かされるのですが、弟子たちもあまりその理解度が群衆と変わらないのです。ここですごいのは、両者だと思います。イエス様の忍耐はすごいです。そして弟子たちもすごいです。自分たちがどんなに物分かりが遅くても、それでもイエス様といっしょにいることを決めているのです。私たちも同じようでありたいです、イエス様の言われていることについて、物分かりが悪くとも、それでもイエス様といっしょにいることを決めるのです。そうすれば、必ずイエス様の忍耐で、聖霊の働きによって、自分の理解をすることができます。

14 種蒔く人は、みことばを蒔くのです。15 道端に蒔かれたものとは、こういう人たちのことです。みことばが蒔かれて彼らが聞くと、すぐにサタンが来て、彼らに蒔かれたみことばを取り去ります。16 岩地に蒔かれたものとは、こういう人たちのことです。みことばを聞くと、すぐに喜んで受け入れますが、17 自分の中に根がなく、しばらく続くだけです。後で、みことばのために困難や迫害が起こると、すぐにつまずいてしまいます。18 もう一つの、茨の中に蒔かれたものとは、こういう人たちのことです。みことばを聞いたのに、19 この世の思い煩いや、富の惑わし、そのほかいろいろな欲望が入り込んでみことばをふさぐので、実を結ぶことができません。

主は、ご自分の言葉を種と形容し、そしてそれを受け入れる人々の心を土に譬えておられます。ペテロは、自分の第一の手紙でも、こう言いました。「1:23 あなたがたが新しく生まれたのは、朽ちる種からでなく朽ちない種からであり、生きた、いつまでも残る、神のことばによるのです。」生きた、いつまでも残る神の言葉によって、私たちは霊的に新しく生まれて、そして、純粋にそれを受け入れることを2章2節で話しています。乳飲み子のように、純粋な霊のお乳を求めなさいと勧めています。

第一の土、畦道は、しばしば起こっていることです。その堅い土を、全く御言葉を受け入れない頑なな心を意味しています。そしてそれを餌としてついばんでいく鳥を、サタンとしています。このことは、しばしば起こりますね。私が思い出すのは、高校の同窓会があって、同じテーブルにたまたま、同じ大学を卒業した先輩がいました。私たちの大学が、キリスト教の精神によって建学され

たところであることを、ほとんど知らなかったのです。けれども、キャンパスには宗教部の方が、掲示板に御言葉を掲げていて、週ごとに新しい聖句に取り替えられます。心が完全に頑なにさされているので、サタンがそういった御言葉やチャペルの存在さえも、その人の記憶から取り去っていた、ということができるでしょう。

けれども、大きな挑戦は第二の土、第三の土なのです。群衆たちは、第一の土の人は少なかったと思います。その中にパリサイ派や律法学者の人たちがいたし、またそのシンパもいたことでしょうから、第一の土の人たちもいたのですが、多くが第二、また第三の土です。教会の礼拝にまで集われる方々であれば、またこの説教をオンラインで聞いておられる方であれば、第一の土でないことは確かです。けれども、第二と第三の土である可能性はあります。

第二の岩地ですが、これは、感情的に主のことばを受け入れた人たちです。「すぐに喜んで受け入れます」とあります。受け入れた時には、話に感動して、大きな反応を示します。けれども、その場限りにしたいのです。実際の生活のことになると、そこにはいろいろな責任が伴います。ましてや、御言葉を本気で受け入れるならば、犠牲が伴います。イエス様がここで、困難や迫害が来ると言われました。イエス様を自分の救い主として受け入れると言った人であっても、その時は涙を流して喜んでいても、もはや祈ることはしていない、イエス様の名を呼び求めることもしていない、ということであれば、岩地に種が落ちた状態であります。

第三の茨ですが、この人は基本的に御言葉を心に受け入れています。岩地のような問題はありません。種は心に植えられ、根も張っています。ところが、同じように茨の根も張っているのです。心が二つに分かれていて、一方では主を求めて、もう一方では世にある楽しみを求めています。そして、この状態は全く楽しくありません。教会において罪ばかりが示されるから、喜びがなくなってくるし、世においても主を思い出してしまうから楽しみがなくなってしまう。しまいには、見返りがない世のほうを次第に選ぶようになります。それで、実が結ばれないのです。

あるいは、主についての事は、適当に振る舞います。つまり、形だけはクリスチャンでいます。そして基本的に、世にあることを楽しむことが主体になっています。自発的に、主体的に自分が主についてのことに関わっていきたくはしません。愛というのは、自発性、主体性、積極性がいつも伴っていますが、心は世のことにあるので、しなければいけないことを終わらせたなら、去ってしまうのです。主に対する、また兄弟たちに対する愛や情熱が冷えてしまっている状態です。

あるいは、世についてのことにいつまでも縛られている人もいます。パウロが、「I コリ 3:1 キリストにある幼子」と呼んでいるようなこともあります。つまり、いつも自分を喜ばせることを求めています。愛による成長、成熟によって、みなさんの益になることを求めるのではなく、気分を害したり、腹を立てたり、満足していません。ちょうどお菓子ばかり食べている人が、栄養のバランスが著しく欠

けているので、いつも苛ついているようなことが、霊的に起こっている状態です。初めの時は、誰でも霊的に幼子であり、それは美しいことです。けれども何年経っても同じ状態であれば、体は成長しているのに、赤ん坊と同じようにおむつをしている状態であり、哀れです。

第二の土に対して、何が処方箋でしょうか？「神を信じること」ですね。困難なことが起こっても、そこで心を苦くさせず、神がそれでも共におられることを信じ、神が何かを行われていることを信じることです。そして、主のところへ個人的に行ってください。主がご臨在の中で深い慰めを与えてくださいます。心を苦くしたり、自己憐憫や被害者意識に囚われると、主が見えなくなってしまう。第三の土に対しては、主との交わりの時間、また主にある兄弟たちとの交わりを第一にしてください。思い煩いや富の感わしが来るのは、それは自分が何かをしているからです。お金をもうけることについても、自分の趣味を求めるとしても、何か資格を得るとしても、自分が何かをしていることが主体です。けれども、本質は自分が何かをしていることではなく、主と時間を過ごすことです。また主にあって共に時間を過ごすことです。仕事や動きではなく、関係がもっと大事なのです。

20 良い地に蒔かれたものとは、みことばを聞いて受け入れ、三十倍、六十倍、百倍の実を結ぶ人たちのことです。」

第四の土が、イエス様が願われていること、私たちが造り、選ばれた目的です。実を結ばせることです。ですから、私たちは救われている、救われていないということを気にします。ある時に、このような横暴な振る舞いをしている牧師は、本当に主を知っているのだろうか？と問いかけた人がいて、ある人が、「救われていることを疑ってはいけない」ということを話していました。なぜ、それも救われている、救われていないということが中心の話題になりがちですが、そうではなく、「救われたのにふさわしい実を結ばせているのかどうか？」が問われないといけないのです。

気を付けていただきたいのは、実は自分では結ばせることができません。自分は飽くまでも畑であり、土です。成長させてくださるのは神です。そして、多く人が目に見えるものに囚われてしまいます。ですから、感情的に主を受け入れたことや、表向き教会生活をしているということに目が留まりがちです。感情にしても、習慣にしても、私たちの霊的状态とは関係がありません。実を結ばせるというのは、本当に人目に着かないところで、地道に、忠実に主の前に出て行っているか？ということに拠ります。御言葉を受け入れ、聞いて、それを自分のものとしていく作業を怠っていないかどうか？なのです。主との交わりをしているかどうか？本気で主が語られたことを聞き入れて、それを聖霊の力によって行なおうとしているかどうか？であります。

そして、信仰をもって御言葉を聞いて、従っているのであれば、その心の向きが後に、三十倍、六十倍、百倍の実を結ぶことになるのです。これが神の方法です。これは個人の業績ではないのです。むしろ、自分が心を神と一つにした時に起こる、御霊による働き、神の偉大な業なのです。

パウロを告訴した者は、彼のことを「この男はまるで疫病のような人間(使徒 24:5)」と言いましたが、以前の訳ですと疫病が「ペスト」と訳されています。悪意をもってみたらそうなるでしょう。どんどん感染するかのように広がって行くのです。しかし、もちろんそれは疫病ではなく、むしろ魂やその人の人生に癒しと救いを与えるのですが、それが感染症のように広がっていくのです。御言葉は、それだけの力と命を持っています。ですから大事なことは多くありません。自分の心から始まります、自分が神のことばに聞き入り、受け入れる時に、それがどれだけ自分だけでなく、周囲の人々に影響を与えるのです。それは、自分ではなく、神の言葉の力なのです。

2B 聞き方への注意 21-25

21 イエスはまた彼らに言われた。「明かりを持って来るのは、升の下や寝台の下に置くためでしょうか。燭台の上に置くためではありませんか。22 隠れているもので、あらわにされないものではなく、秘められたもので、明らかにされないものはありません。23 聞く耳があるなら、聞きなさい。」

イエス様は、御言葉を聞く、その心の姿勢は必ず明らかにされることをここで話されています。主を心の中で受け入れ、この方にあって生きて行く生き方は、人の目で認めることがないようなことばかりです。むしろ、イエス様は、人に見せるように良い行いをしてはいけなからして、戒められました。「マタ 6:3-4 あなたが施しをするときは、右の手がしていることを左の手に知られないようにしなさい。あなたの施しが、隠れたところにあるようにするためです。そうすれば、隠れたところで見られるあなたの父が、あなたに報いてくださいます。」けれども、その主に対する働きは、人に認められなくとも主が必ず報いてくださいます。主は、良いことも悪いことも、すべて隠れていたことを明らかにしてくださいます。テモテに対して、パウロはこのように教えました。「I テモ 5:24-25 ある人たちの罪は、さばきを受ける前から明らかですが、ほかの人たちの罪は後で明らかになります。同じように、良い行いも明らかですが、そうでない場合でも、隠れたままではあることはありません。」

ですから、心の中でどのように御言葉を受け入れたかは、後になって自ずと分かります。初めは分かりませんが、けれども後で露わにされます。弟子たちの中でも、誰もイスカリオテのユダが裏切ることは気づきませんでした。彼はいつまでも隠し通せると思ったのですが、イエスの言葉を受け入れていない彼は、最後に裏切ることになったのです。ですから、本当に御言葉を聞いているかどうか？が問われるのです。

24 また彼らに言われた。「聞いていることに注意しなさい。あなたがたは、自分が量るその秤で自分にも量り与えられ、その上に増し加えられます。25 持っている人はさらに与えられ、持っていない人は、持っているものまで取り上げられてしまうからです。」

ここは午前礼拝でお話したことです。主のことばを聞いていて、自分がそれを侮るのであれば、

その悔りに相応しい定めを受けます。敬うのであれば、その敬いにふさわしい報いを受けます。そして、神は恵みを無尽蔵に持っておられる方ですから、一度、受け入れた人は今、持っているもの以上にさらに与えられ、拒んだ人は、自分が持っていると思っているものさえ、保つことができません。命や富は、取り去られてしまいます。

3B 種からの成長 26-32

そしてイエス様は、神の国について譬えでお語りになります。二つの喩えを使われます。

26 またイエスは言われた。「神の国はこのようなものです。人が地に種を蒔くと、27 夜昼、寝たり起きたりしているうちに種は芽を出して育ちますが、どのようにしてそうなるのか、その人は知りません。28 地はひとりでに実をならせ、初めに苗、次に穂、次に多くの実が穂にできます。29 実が熟すと、すぐに鎌を入れます。収穫の時が来たからです。」

神の国と種蒔きは、よく合うようですね。ここの種蒔きの喩えでは、先に話した、「神が成長させてくださる」ということを話しています。私たちではなく、主ご自身がその御言葉によってご自分の働きを行われます。イザヤがこのように預言しました。「イザ 55:10-11 雨や雪は、天から降って、もとに戻らず、地を潤して物を生えさせ、芽を出させて、種蒔く人に種を与え、食べる人にパンを与える。そのように、わたしの口から出るわたしのことばも、わたしのところに、空しく帰って来ることはない。それは、わたしが望むことを成し遂げ、わたしが言い送ったことを成功させる。」

私たちは、どうしても自分の心の内や、また自分の目で確認できることで自分の霊的状态を推し量ろうとします。けれども、イエス様がここで強調しているのは「知りません」ということなのです。寝たり起きたりしているうちに、種が苗、次に穂、そして実が穂にできます。聖霊が、神の御言葉を通して皆さんお一人お一人を変えます。

聖霊の力について、牧者チャックがあることを話してくれました。正確に思い出せないのですが、大体、こんな話です。教会の人らしいのですが、奥さんが教会に通い、ついに旦那さんも信仰を持ちました。彼は口が悪くて、その癖がなおらなかったそうです。けれどもイエス様に出会い、心はルンルンだったそうです。ある時に、アメリカなので庭掃除をする時に、芝刈りをするのですが、電動の芝刈り機で刈っていました。すると木にぶつかってしまい、おでこから血が流れるほど酷かったそうです。ところが、彼の口から酷い言葉が出なかったそうです。それで奥さんのところに行って、おでこから血が流れている顔で、「おい！おれ、悪い言葉、吐かなかったぞ。」と喜んでいたら、奥さんが、「あら、あなた、ここ一年、ずっと言っていないわよ！」そうです、自分自身が気づいていないうちに、聖霊に満たされていて、神が変えていてくださっていました。

そしてもう一つ、収穫の時が来ると、刈り入れが始まります。これは、世の終わりのことです。世

の終わりに、主が戻って来られる時に、行われることです。つまり、すべての行いに対して、その結ばれた実に対して、主が必ず報いをされるということです。私たちは、主にお仕えしているときに、忘れてはいけないのは、主に対して仕えているということです。主人が誰か？ということです。人々に仕えているのですが、実は人々を通してイエス様に仕えています。そして、主ご自身がその奉仕に対して、ふさわしい報いを与えられます。

ですから、人からどう見られるのか？は、気にしなくてよいのです。もちろん、主は時に人を通して、自分に語ってくださることがあります。けれども、それもまた聖霊が働いてくださること。人がどう思うのか、あるいは自分自身がどう判断するのかということも、あまり問題になりません。パウロがこう言いました、「I コリ 4:3-5 しかし私にとって、あなたがたにさばかれたり、あるいは人間の法廷でさばかれたりすることは、非常に小さなことです。それどころか、私は自分で自分をさばくことさえしません。私には、やましいことは少しもありませんが、だからといって、それで義と認められているわけではありません。私をさばく方は主です。ですから、主が来られるまでは、何についても先走ってさばいてはいけません。主は、闇に隠れたことも明るみに出し、心の中のはかりごととも明らかにされます。そのときに、神からそれぞれの人に称賛が与えられるのです。」

30 またイエスは言われた。「神の国はどのようにたとえたらよいでしょうか。どんなたとえで説明できるでしょうか。31 それはからし種のようなものです。地に蒔かれるときは、地の上のどんな種よりも小さいのですが、32 蒔かれると、生長してどんな野菜よりも大きくなり、大きな枝を張って、その陰に空の鳥が巣を作れるほどになります。」

イエス様は、神の国をまた異なる譬えで話しておられますが、どうやって例えたらよいだろうか、と少し思い巡らしています。そこで出てきたのが、「からし種」です。まるで粉末のような小さな種です。その種から、灌木状になり、3-4 呎に生長すると言われています。それだけ、大きな成長を遂げるのですが、ここで少し、気を付けないといけない表現をイエス様はされています。「空の鳥が巣を作れるほどになります」と言われていることです。このように大きな木になる時、獣や鳥が棲みつくような大きな木になることは、預言書では、必ずしも良い意味で使われていません。実に、アッシリアの国、そしてバビロンの国に対して使われました。「エゼ 31:5-6 その丈は野のどの木よりも高くなり、送られる豊かな水によって、小枝は茂り、大枝は伸びた。小枝には空のあらゆる鳥が巣を作り、大枝の下では野のあらゆる獣が子を産み、その木陰には多くの国々がみな住んだ。」これはアッシリアに対する預言です。しかし、高慢になったので切り倒されます。同じように、ダニエル 4 章でネブカドネザル治めるバビロンが、「4:12 その木陰には野の獣が憩い、その枝には空の鳥が住み、すべての肉なるものはそれによって養われた。」とあり、その後、聖なる者によって、根株を残して切り倒されたのです。そして、イエス様の種蒔きの譬えには、まさに種をついばんで食べて行ってしまったのは、サタンのことでした。

ここでイエス様は、神の国は、御言葉を受け入れた人々によって始まっていく中で、あるところで異様に大きくなり、そして世と一つになってしまうところまで至ることを示しています。キリスト教の歴史がそれを物語っていました。ローマ帝国の中で、初めはユダヤ教から迫害を受け、そしてローマ帝国からの迫害が激しくなりました。それでもキリスト者は信仰を守りました。ついにコンスタンティヌスという皇帝自身がキリスト教を受け入れ、313年のミラノ勅令によってキリスト教が公認されたのです。そして392年に皇帝テオドシウスによってキリスト教がローマの国教となりました。その時に一夜にして、全ての異教徒もキリスト教徒となったのです。これまでの異教は禁じられたのですが、キリスト教の装いをしているだけで中身は異教というものも含まれました。

これが先ほど話しました、「イエス・キリストの福音が埋没してしまう」ということなのです。今、群衆が大勢来ています。彼らの来ている目的が変わってしまっています。もし彼らの必要を満たそうとするならば、もはやイエスがキリストであり、神の子であるという福音が伝わらずに、単なる癒しを行う魔術師でも構わない訳なのです。初めにお話した、キリストを名乗らない慈善団体は、数ある慈善団体の中に埋もれてしまうのです。地の塩、世の光ではなくなり、自分自身が世に取り組まれてしまいます。私たちは、世に対して証しをしますが、キリストの塩気をなくしてしまえば、元も子もないのです。

2A 嵐の中での信頼 35-41

ここまで主が、譬えで教えられました。35節から、また次の5章において、マルコによる福音書の真骨頂とも言うべき、大きな出来事が起こります。35節では、イエス様をご自分のことばを、嵐の波にしっかりつけることによって、その権威を行使されること。そして5章では、大勢の悪霊レギオンに対峙して、それらを追い出されることです。つまり、主はこれまで教えられたこと、みことばが生きて働いていることを弟子たちに示して行かれます。云わば実地訓練です。

35 さてその日、夕方になって、イエスは弟子たちに「向こう岸へ渡ろう」と言われた。36 そこで弟子たちは群衆を後に残して、イエスを舟に乗せたままお連れした。ほかの舟も一緒に行った。37 すると、激しい突風が起こって波が舟の中にまで入り、舟は水でいっぱいになった。

イエス様と弟子たちが乗っている舟が、嵐によって水没しそうになっていました。ガリラヤ湖には、かなり強い風が吹きやすいです。なぜなら、ガリラヤ湖は海拔マイナス213mであり、山に囲まれています。東はゴラン高原、西はガリラヤの山地で、その背後にはレバノンの山脈があります。それで、大きな温度変化が起こり、激しい風が谷から吹き降ろされ、それで波が急に荒くなる場合があります。

38 ところがイエスは、船尾で枕をして眠っておられた。弟子たちはイエスを起こして、「先生。私たちが死んでも、かまわないのですか」と言った。39 イエスは起き上がって風を叱りつけ、湖に「黙

れ、静まれ」と言われた。すると風はやみ、すっかり凧になった。40 イエスは彼らに言われた。「どうして怖がるのですか。まだ信仰がないのですか。」41 彼らは非常に恐れて、互いに言った。「風や湖までが言うことを聞くとはいったいこの方はどなたなのだろうか。」

イエス様が風にしっかりつけたので、すっかり凧になりましたが、それを見て弟子たちが恐ろしくなりました。いわゆる畏怖の念です。これまでは人間としてのラビであるイエスを見ていましたが、ここをもって弟子たちに、神ご自身の力、神の子としての力をお見せになったのです。イエス様は、弟子たちに対して少しずつですが、ご自分の正体を見せていかれています。私たちは、全て後知恵で、現場にいた弟子たちは、徐々に、徐々に、イエスが確かにキリストで、神の御子であることを知って行ったのです。私たちの信仰もそうでしょう、初めからイエスに確信を持っている人は少ないです。少しずつ知って行き、そしてこの方が信頼に値する方だという確信に至るのです。

ところで、何を言ってイエス様は、「どうして怖がるのですか。まだ信仰がないのですか。」と言われたのでしょうか？それは、「向こう岸へ渡ろう」と言われた。」というところにあります。向こう岸ですが、ガリラヤ湖はとても小さく、10 キロにも満たない距離だったでしょう。何気なくイエス様は語られたのだと思いますが、はい、ここでイエス様の言葉を、どのようにして聞いていたのかを試されていたのです。よく聞きなさい、と言われたのはそういう意味なのです。向こう岸に渡るのであるから、向こう岸に渡るのです！主が語られれば、その通りになるのです。彼らは聞いてはいたけれども、まだ悟っていませんでした。私たちも、数多くのことについて、主の御言葉についてそうではないでしょうか？つまり、聞いているのですが、まだ悟っていないのです。

ここで、イエス様がぐっすり眠っている点にも注目してください。舟の後ろのほうに小さな台があり、普通はそこに枕があって船長がゆっくりすることができました。イエス様はそこで嵐なのに、ぐっすり眠っておられます。そこには、神ご自身の姿があります。神は嵐のような中にあっても、全く動じることなく、冷静なのです。神の本質の現れであられるイエス様は、嵐の中でも全く動じない神の姿を表していたのです。また、嵐の中にあっても、そこに神がおられ、そして私たちと共におられるということも示していました。私たちは何が何だか分からなくなっている時に、イエス様がそこにおられます。そして、イエス様は慌てていません。父なる神に全き信頼を寄せておられます。同じように私たちも、嵐のような試練にあっても安きを得ることができるのです。